〔書言字考節用集七器財〕提盒（サゲアウ）又作ニ提重ニ

〔骨董集上編中〕重箱硯蓋

或書に、重箱は慶長年中、重ある食籠にもとづきて、始て製造すといへるは、うけがたし、今按るに、重箱は衝重の遺製なるべし、衝重の制うつりて緣高となり、緣高の足をとりて重るを重箱といふなるべし、古重箱に肴物を組入、松の折枝などかざれるもの、衝重に肴物を組入る飾を略せるものとおぼゆ、衝重も終にはかさねおけるから、ついがさねの號あるならん、但食籠の號は、重箱より少しふるかるべし、（古製の食籠は、いかなる物ぞ、籠にあみたるもの歟、）下學集文安に、衝重、緣高、食籠の名を出して、重箱を出さず、尺素往來文明に、食籠見えて重箱の名見えざれば、玄かおもへり、右の諸書に、重箱は慶長年中、始てつくりしといへるを、うけがたきゆゑは、既に文龜本の饅頭屋節用に、重箱の名目見えたればなり、なほふるくは、能の狂言の、菊の花といふに、時にこしもとが先盃を持て出ました、なんでも一ッたべふと存じてゐましたれば、つゝとわきへもつていきました、又其次に結構なまき繪の重箱に、色々の肴を入て持て出ました云々といふことあり、又鈍根草といふ狂言に、宿坊から重の内が參りましたといふことあり、能の狂言のふるきことは、前にもたび〳〵いふ如し、さて寛永の比より、元祿の比までの古畫、或は印本の繪などを參考するに、酒宴に肴を盛器は、すべて、重箱也、松檜草花などのかいしきをして盛たり、食籠鉢などに盛たるは、まれ〳〵あるのみ、○中略重箱に肴を盛ことは、元祿の末にすたれて、硯蓋に盛ことは、寶永年中に始りしとおもはる、

〔嬉遊笑覽二下器用〕考槃餘事、提盒足以供六賓之需といへるは、六人前の弁當のさげ重なり、尺素往來に六納（イレ）の樫桃、下學集、食籠樫桃、また提爐といふ物あり、これは茶弁當なり、さげ重といふ物、他に持行ものにて、これも弁當とおなじくて、品よき方にや、今は坊間などには、廢れたる物なれど、五人づめ七人づめの弁當箱ありて、古道具屋に出て買ふ者もなければ、組入たる膳椀重箱一品づ